

共同体，視点，そして身体

——レイモンド・ウィリアムズ『辺境』を読む——

大 貫 隆 史

1993年、マーストリヒト条約が発効するその年に、スチュアート・ホールは、レイモンド・ウィリアムズに対する共感を書き綴りつつも、根底的な批判を展開した長編の論考を『カルチュラル・スタディーズ』誌に寄せている。ホールは、この長文の論考の冒頭で、みずからの「知的そして政治的な形成プロセスに重大な影響」をウィリアムズが及ぼしたことを、はっきりと認めている。生まれ故郷のジャマイカを離れ、「支配的な文化的システムを中心としか形容のしようがない制度、すなわちオックスブリッジ」(Hall 349-350)で教育を受けたホールにとって、ウェールズとイングランドの国境沿いの村パンディから移動し、ケンブリッジである種の疎外感を経験したウィリアムズは、一種の導き手あるいは先行者として、ごく重要な意味を持つ書き手だった、ということになる。

しかし、そうしたイングランド的な「支配的な文化システム」への対抗軸として、ウィリアムズが持ち出してくる「文化 (civility)」, すなわち、「一揃いの諸規範」は、ホールによって、厳しい批判の俎上に上げられることになる。そうした「文化 (civility)」とは、具体的には、ウィリアムズの「境界沿いのくに (border country)」という「代替的で、そして異なった「分かる共同体 (knowable community)」の経験から引き出されてきた」ものことだ (350)。ホールの見るところ、この「分かる共同体」は、1990年代のグローバル化する世界にあって、実効性をもたない。というのも、「西欧的な国民国家の「中心主義的 (centred)」ナショナリズムが、均質的にはないかたちにおいてであれ、徐々に崩壊し、国家横断的な諸関係と地域的なアイデンティティの双方が強化される」(354) なか、ウィリアムズ的な「分かる共同体」は、溶解しつつある「中心主義的」ナショナリズムの危険な代替物として機能してしまいかねない——こうホールが診断しているためである。グローバル化する資本主義が、実際には、共同体内における様々な分断をさらに深めているにもかかわらず、「分かる共同体」はそうした現実を

糊塗してしまいかねない, というわけだ。

ホールの批判はごく適切なものにも見える。「分かる共同体」とは, ごく均質的, 因習的であり, 排外的な集団, すなわち「顔見知りの共同体」のことに過ぎないと解されるとき, それは資本主義のグローバル化がもたらすダイナミックな変容に対応できるような柔軟性を欠いた, 非常に硬直化した集団の謂いに過ぎなくなるだろう。

1973年刊行の『田舎と都会』においてウィリアムズは, ジェイン・オースティンとジョージ・エリオットそれぞれが描く「分かる共同体」を記述しているのだが, 前者に確かに大きな批判が加えられている一方で, 後者のエリオットによる「分かる共同体」については, 必ずしも全面的な否定とはなっていないことに注意が必要ではないだろうか。「[エリオットの] 分かる共同体とは, それに必要な強勢をもって記録したいと, 彼女が進んでそう思っている, この共同の生活」なのであり, その小説では, 「我々の側の人びと (our people) という, かねてから多数派でありつづけてきた人びとが営む実際の生活」と「教育」との関係が問われてきたとウィリアムズは書いている (*The Country and the City* 171-173)。つまり, 「共同の生活 (common life)」であるからには, その成員が「実際の生活」のなかで, お互いのことを「分かる (knowable)」ものとして解しあうことが, やはりある, ということになるだろうか。問題は, その「分かる共同体」と「教育」を受けた書き手 (writer) との関係であり, さらに, 「分かる」として, どう「分かる」のかという個別の問いが重要になる。もちろん, ウィリアムズの「分かる共同体」には, これらの問いが提示されていないと言ってしまうこともできる。そのとき, ホールの批判は適切この上ないものになるだろう。

ただし, そう言い切ってしまう前に考えてみたいのが, ウィリアムズの「分かる共同体 (knowable community)」には時制が複数あるのではないか, という疑問である。それは, 「互いのことを知りきった共同体 (known community)」という, 過去時制のみで成り立つ共同体のことではなく, 未来の時制をも含み込んだ共同体のことなのではないか。少なくとも, ウィリアムズの小説『辺境 (*Border Country*)』に記述されているのは, そうした「分かり合える共同体 (knowable community)」なのではないだろうか。共同体に蓄積されてきた資源を, じつのところ想像的に活用しながら, 新たに定住しようとするよそ者 (stranger) や, 奇異な振る舞いをする者とも, どこかの時点で「分かり合えるだろう (be able to know each other)」と, 共同的 (communal) に想像しようような

組織体——これが“know-able”な共同体の、その実相の一部なのではないのか。¹

「ウェールズ文庫」版の『辺境』に寄せた序文で、ウィリアムズの伝記作者ダイ・スマイスが言うように、「自然」との戦いと「社会的な諸階級のあいだの」闘争が、同様の激しさをもって展開されながら、「人間的な定住の過程」が「つねに変容する共同体」とともに描き出される「このくに (this country)」(xii)において、共同体とは、新参者や奇矯な個人を、むしろ生存のための重要な資源として活用してきたのではないか。こうした疑問をまずは手がかりとしながら、以下、『辺境』を読み解いていくことにしたい。

具体的には、ウィリアムズの実在の父をモデルとしたと言われるハリー・プライスが、「分かり合える共同体」に「定住 (settle)」してゆく複雑なプロセスを考えることになる。「複雑」というのは、そこでは、ダイ・スマイスが示唆するように、共同体と「階級」の問題が、字義通りの「生存」にかかわるような緊張感をはらむためであり、さらには、「定住者」ハリーの「自然」との関わりが、じつのところ「ロマン派的な分離」さらには「思想と生活の分離」と本稿が呼ぶ問題系にまで絡んでくるためであるのだが、まずは、『辺境』の筋立て＝アクションを見ていくことにしよう。

1. 小説『辺境』におけるよそ者 (stranger) としてのハリー・プライス

小説『辺境』は、若き経済史学者マシュー・プライスのもとに、父ハリー・プライスが心臓の病気で倒れた、という電話が入ってくる場面から始まる。父の危篤の報を受けてマシューは、急ぎイングランドから辺境 (ボーダー・カントリー) へと向かうことになる。

19世紀ウェールズにおける人口移動を研究対象としている若手の学者マシューは、ある困難を抱えている。それは——

わたしが学んできた技術とは、温度が一定に保たれてさえいれば、氷の塊のような堅固さと正確さをもつものだ。しかし、そういう安定した温度を、わたしは実際には維持できない。冷蔵庫の扉は開いたままなのだから。それ [実際に自分が行動し

¹ そして、こうした実相を記述しうるかどうかは、書き手のポジショニング次第であり、『田舎と都会』のウィリアムズが言うように (165)、そうしたポジショニングの有り様もまた、「分かる共同体」の「実相 (reality)」の一部なのだろう。

てきたこと] は, グリンモーからロンドンへの人口移動などではなく, 実質 (substance) の変化だ。彼らが自分たちの村を離れたときに被った変化も, そういうものだったに違いない。(Border Country 4)

マシューが研究対象としている 19 世紀ウェールズにおける人口変化とは, 産業革命が本格的にウェールズで進行するようになる 19 世紀中葉以降, 南ウェールズへの移民の増加と南ウェールズ自体での人口の増加により, ウェールズの人口構成が強烈に変化した現象のことである。19 世紀中盤の人口は, 20 世紀初頭には, 倍増し 250 万人を越えるに至ったのだった (Davies 387)。

マシューの学んだ社会科学的方法は, こうした変化を, 研究対象として, あたかも凍結させて動きのないものとして観察するものとしては, じつに優れている。しかし実際には, 「冷蔵庫のドアは開けられる」ものである。研究対象は, 変化してしまう。19 世紀ウェールズにおける人口の倍増とは, 切り離された対象というよりも, むしろ数多の人びとによって生々しく生きられた経験であって, それは, 変化しながら, いまなお人びとの暮らしに影響をあたえずにはおかない。

ところが, この生々しく生きられ, かつ, その意味や価値といったものが, 日々変化する経験を記述する方法を, 大学講師のマシュー・プライスはもっていない。これが彼の危機であり, この危機を抱えたままマシューは, 臨終の床につきつつある父ハリーのもとに, 帰郷することになる。

小説『辺境』は, マシューの危機をめぐる筋立て=アクションと, 父ハリーが故郷グリンモーに定住するまでのプロセスを描く筋立ての, 二重の筋立てから構成されている。前者マシューの筋立ては 1950 年代の後半, 後者ハリーの筋立ては 1920 年代からマシューが故郷を離れることになる 1930 年代後半までを扱うもので, 時間軸としては, とりあえず別々のものであるにもかかわらず, この二つの筋立て, 二重のアクションは, どこかで折り重なってくる, あるいは, 決定的な連続性を帯びてくることになる。この, 交錯する二つのアクションという問題については, 本稿の後半部分で述べることになるが, まずは, 両者の違いを明らかにしていくことにしたい。

繰り返すことになるが, ハリーのアクションは「定住」のプロセスのそれである。その一方で, マシューのアクションは, まずは, 「故郷喪失」のそれなのである。ロンドンでのマシューとその妻スーザンの家をめぐる描写が, そうした「喪失」を寓意的に

よく示している。

ふたりの家は、通りの一番奥にあった。灰色で、出入り口はひとつ、そして、大きな張り出し窓がついていた。門のあたりには、きんぐさりの木が一本生えていて、実際に金の鎖のような花が咲くときはもちろんのことだが、咲かないときにも、この花の呼び方を忘れないように覚えてしまっていたのだった。門には、「きんぐさり荘」という表札のようなものが貼り出してあったのだが、これは、もう燃やしてしまっていた。(5)

言い換えると、マシューは、「場所」に地層のように積み上げられた歴史のようなものから、意識的に距離を取ろうとしている。きんぐさりは、ウィリアムズのウェールズ三部作の最終作『マノッドのための戦い』で何度も言及されるハリエニシダ (gorse) にも似た花であり、その意味では、田舎の風景を想起させる花とも言えそうなのだが、かつて「きんぐさり荘」という名前でその「場所」に棲まっていた人びととの繋がりは、その名を表した札を「燃やして」しまうことで、意図的に絶たれている、と言ってもよいだろう。

それでは、1920年に設定された父ハリー・プライスによる、定住の経験はどのように記述されているのだろうか。ただし、その前に押さえておきたいのが、「視点」という問題である。すでに確認したように、主人公マシュー・プライスは、「氷塊」のような動きを欠いたものしか見てとることのできない、ごく限定された「視点」を携えた登場人物である。その一方で、マシュー・プライスが「マシュー」ではなく「ウィル」と呼ばれていた時期、つまり、彼がグリーンモーを離れて大学に向かう前の時期における「視点」は、同じく限定を被りながらも、その「限定」のあり方自体が、どうやら異なったものなのである。さらに、もうひとりの主人公であるハリー・プライスの「視点」、それも、(先回りして言うとうと)「身体をともなった視点」も提示されてくることになる。次節以降で、経済史学者マシューの「視点」、若きウィルのそれ、そして、ハリーのそれ、という三者の違いを、具体的に考えていくことにしたい。

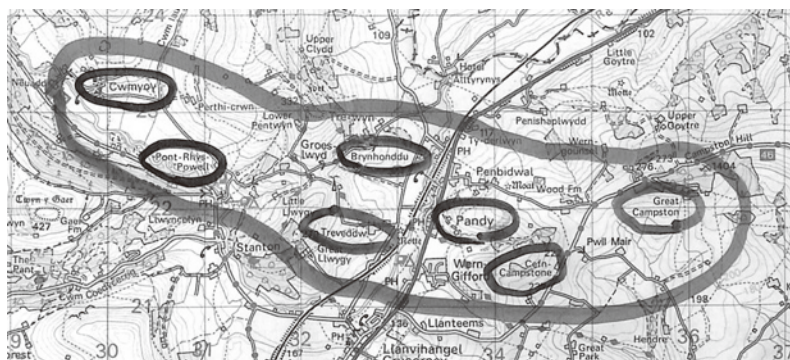
2. 定住者ハリーの「身体をともなった視点」

この「身体をともなった視点」は、具体的にはハリーの定住に向けた数々の行動のな

かに出てくるのだが、まず、第一次大戦から戻り鉄道信号手の職を得たハリーと、その妻エレンがグリーンモーに到着したときの描写を詳しくみてみることにしよう。

山々によって取り囲むように守られたグリーンモーの谷は、ひろびろと緑におおわれている。この谷を知らぬものの中には、グリーンモーは村ではなく、たんに人がまばらに住みながら農業を営んでいる場所にみえることだろう。ハリーとエレンが歩くその道沿いには、家々が並びたっているわけでもなければ、人びとが密に行き交って暮らしている場所があるわけでもなかった。道沿いには、家々がまばらに点在し、ときおり、五、六軒の家々が木陰にかたまっていただけだった。また、本道から東へ西へとわかれていた小径の先をずいぶん進むと、べつの小さな集落が、あちらにひとつ、こちらにひとつという具合だった。東の方を見てみると、木々の生い茂った尾根のもとに、ケヴン、ペニドア、トレヴェドゥ、キャンプストーンという集落が、西には、山々のふもとに、グリナント、クムホンズィ、ザ・パンディ、ザ・ブリッジ、パンテグがあった。こうしてまばらに散らばる集落が、グリーンモーというひとつの名前でまとめられているのであって、その意味では、グリーンモーという村がタニ (valley) であり、タニの全体のことなのだ。(34-35)

グリーンモーは、実際には存在していない地名であり、おそらくはウィリアムズによる想像上のものである。そして通例、グリーンモーは実際の地名であるパンディのことだとされている。しかし、この引用のなかにある地名を、英国陸地測量部 (the Ordnance Sur-



パンディ周辺地図

vey) の地図を使って、実際の地名と照らし合わせてみると、パンディとグリーンモーは、実は一致しないことが判明してくる。

上の図において、マルを付けた七つの地名の一番左側にある“Cwmyo”の“Cwm”とはウェールズ語で“valley”のことで、その谷間を流れている川は“Afon Honnddu”（ホンズィ川）だから、“Cwmyo”は、作中では“Cwmhonddu”（クームホンズィ／ホンズィの谷）に対応しているのかもしれない。同じく、左から二番目の“Pont-Rhys-Powell”の“Pont”とはウェールズ語で“bridge”のことであり、作中の“The Bridge”に対応している可能性がある。こうした照合の作業をしてみると、あくまで仮説に過ぎないが、『辺境』という小説において、“Glynmawr”と名指されているのは、現在パンディと呼ばれる小集落よりも、おそらくは大きなマルで囲んだようなかなり広めのエリアを指していることになるだろう。なお、“Glynmawr”の“glyn”とは“valley”の意、“mawr”は“big”もしくは“great”の意だから、英語に翻訳すると“Glynmawr”は“Great Valley”，日本語に無理やり翻訳してみるなら「オオタニ」ということになるのかもしれない。「谷」といっても、その谷上の地形をつくり出す山々は日本であれば「裏山」程度の高さしかなく、山肌も、かつての氷河の浸食作用により、かなりなだらかになっているため（*People of the Black Mountains I* 39）、日本語の「峡谷」や「谷」とはだいぶイメージが変わってくるのだが。

ともあれ、もう一度先の引用を参照してみると、グリーンモー、あるいはウェールズ語的に読むのであればグリーンマウルという共同体を構成しているのは、“Cefn, Penydre, Trefedw, Campstone”（ケヴン、ペニドレ、トレヴェドゥ、キャンプストーン）そして“Glynnant, Cwmhonddu, The Pandy, The Bridge, Pantag”（グリinnt、クムホンズィ、ザ・パンディ、ザ・ブリッジ、パンタグ）という、九つの小集落となる。現在残っている実際の集落名にしてもそうなのだが、明らかにウェールズ語（風）の集落名（ケヴン、ペニドレ、トレヴェドゥ、グリinnt、クムホンズィ）と、明らかに英語の集落名（そのほか）が混じり合っているのが分かってこよう。

上記の描写を、マシューではなくハリーの「視点」から記述するウィリアムズは、これをかなり意図的に行っていると言って良さそうだ。このウェールズとイングランドの境界沿いのくに、ボーダー・カントリーでは、ボーダーそのものが、境界そのものが頻繁に書き換えられてきた。そうであるからには、歴史をさかのぼれば、もともとはウェールズ語を話す人びとが住み着いた集落と、英語を話す人びとが住み着くようになった集

落がとなりあっていても、何の不思議もないことになる。21世紀の現在、ウェールズ語と英語のバイリンガルが数としてはあまり目立たない場所であるとしても、かつては、言語にまつわる緊張感が強かった時代があったのだ、と読者はその想像力を働かせるよう促される、ということになろうか。

こうなると、グリーンモーという共同体は、均質でもなければ、たんに排外的なそれ、と言って済ませられなくなるのだが、それはひとまず置くとしても、ここでのハリーの「視点」、すなわち、ウェールズ語と英語の集落名が混在して現在に至る、という複雑な連続性を見てとる「視点」と、「きんぐさり荘」という表札を「燃やして」しまうマシューのそれとのあいだに、差異化が図られていることが重要になってくるだろう。

言い換えると、ハリーの「視点」は、「定住」を目指すもののそれ、より正確には、「よそ者 (stranger)」がその異質さをたんに消し去ってしまうのではなく、一定の緊張感を保ちながら共同体に住み着いていく際の「視点」ということになる。そして肝心なのは、その緊張感が、観念的あるいは思想的なものではなく、生身のからだをもった人間たちの営みによって生み出されている、という点なのではないだろうか。グリーンモーに住み着き始めて最初に知り合った農夫のエドウィン・パリーによる「開拓」現場を、ハリーが訪ねたときの記述について、少し詳しく見てみよう。

「彼 [エドウィン・パリー] はどこだい？ 見つけてくれよ」

犬が吠えて、大喜びしながらハリーのまわりを駆けまわった。ハリーは、ぬかるみのひどいところを避けながらどンドン歩き、急斜面に拓かれた畑の先に、山の黒々とした稜線をみわたせる場所までやってきた。そこからは、羊のための低い石垣がはっきり見えるのだが、その手前に、松の木が少しばかり群集している部分があり、谷 (valley) からはそれが海に浮かぶ船 (a riding ship) のように見えるのだった。彼 [ハリー] は前屈みになってさらに登り、犬が後から付いてきた。ここまで登ると、風がつよくさわやかだった。こうやって懸命に登ってきて、激しく息をしていると、彼のからだのなかに風が流れこんできて冷え込ませるような感じがした。タチジャコウ草がいたところゴボウとイラクサの下に伸びていて、さらにワラビが密集して重なるように生えていた。(75-76)

松の木が群集している部分は、地元の言い習わしでは、「船 (ship)」と呼ばれている。

というのも、パリーが愚痴をこぼしながら言うように、「春になってみろ、もうそこらじゅうワラビだらけだ、まるでへびみたいにとぐろを巻いて、もつれあって生えてくる」(77)なのであって、いわば、ワラビの「海」に少しばかり「浮かぶ」ように松の木が生えているためである。ワラビを刈り取らないと畑を作ることはできないのだった。あるいは、エドウィン・パリーが言うように、「ワラビだらけ」である以上、「せいぜい羊」を飼うぐらいしかできないのである。

いや、正確にはそうではない。エドウィン・パリーの目にはそう見えるだけであって、「観察者」ハリーの目には、ワラビだらけの「海」はまた違ったものにみえてくることになる。ハリーは、この「海」で、養蜂を行うようになるのだった。

彼[マシュー]の前には木々が細長く立ち並んでいたが、そこを通り抜けて、ワラビの生えた急斜面のところまでくると、ハリーの呼ぶ声が聞こえた。細長い野原が切れて、小さな谷に落ち込むあたりで、ハリーはミツバチの群れを見上げていた。
(242)

エドウィン・パリーは牧羊を行っているわけだが、もちろん、その牧羊の技術自体は、グリーンモーに定住しようとする数々の世代が、「山」を「観察」するなかで実践してきたものだろう。こうした、生活するために「観察」する定住者たちのひとりが、ハリーなのである。養蜂の技術自体は、むろんのことハリーの発明ではない。しかし、それを、グリーンモーの「山々」で実践しようとするとき、まわりにそれをやろうとした人間はいないのだから(だからこそパリーは「せいぜい羊」と言うのだった)、その意味でハリーは「異端」であり「変わり者」なのである。あえて「素人的」に言えば、牧羊の実践も、そうした「異端者」あるいは「奇矯な諸個人」によって実践されてきたのだろう(そうした試行錯誤の経験が詳しく記述されているのが、ウィリアムズの死後刊行小説『ブラック・マウンテンズの人びと』である)。言い換えると、共同体の暮らしとは、同じことがひたすら繰り返される生活様式のことではない。山々を「観察」し、一見、突飛とも思えるようなこと——例えば牧羊や養蜂——を実践する諸個人と、決して切り離すことができない、複雑な実践の総体こそが、「分かる共同体」の実相なのである。

3. 観察者ウィルの「身体を喪失した視点」

しかし、そうした、「身体をもった観察者」、つまり、「懸命に登ってきて、激しく息を」するような生身のからだを持った観察者の系譜は、ハリーの息子マシューに至って、ひとまず、途切れてしまうように見える。奨学金を得て大学に入ることになり、グリーンモアを離れる直前、ウィル（マシューはこの時点まではこの名前と呼ばれている）は山の上に登って、谷を「観察」する。

しかし、ケストレルの山並みまで登って、遠くまで眺めてみるとどうか。そこに見えるのは、もはや、たんなる谷と村 (the valley and the village) ではなく、谷と谷がつながる模様 (the meeting of valleys) であり、彼方にイングランドが空の青さと混じり合って霞んでみえる光景なのだった。その歴史をひもとけば、このくに (the country) は、また異なる様相を呈すことになる。東に見える台地には、ノルマンの城が数マイルおきに建っていて、高大な谷の向こう側の山々をにらんでいる。グリーンモアは、その城下にあるわけだが、どの城にも属さず、それが争いの種となり、どちらからも蹂躪された。南には、グエントンの城もあって、封鎖網に隙はなかった。……あるいは東ではなく南と西を見てみれば、ここにもまた、べつの歴史と、それにともなうべつの国境が見えてくるのだった。石灰岩が露出した斜面があり、石を切り出したり穴を掘られたりした跡がある。この斜面のそばには、数え切れないくらいある荒涼とした岩々に囲まれて見えないが、かつての国境があったのだった。(364-365)

書物で学んだ知識をもって「観察」するウィルの目には、グリーンモアという谷 (valley) の歴史が重層的なものとして見えてくることになる。しかし、その「観察」は、決定的な制約を帯びたものなのであり、ウィルはそれを自覚しているのだった。

彼 [ウィル] は、それぞれの方角を、かわるがわる眺めた。つよい風で目を細めながらも、彼の心は、[教区司祭の] ピューとともに教会の塔に登って星座を見ていたときのように、興奮していたのだった。こういう力、抽象化し明晰化する力が、山にはあった。しかし、最後まで山にとどまっていることはできない。彼は、彼が生をおくっている場所へと帰らねばならない。(365)

ウィルにとって「山」とは、「生活」とは切り離された場所なのだった。「山」に登れば、人びとの暮らしを、重層的な歴史のもと、その全体を俯瞰することができる。しかし、そこでの「山」とは、生をおくることのできない場所なのであって、本論の趣旨に添って言い換えれば、ハリリーのような「身体をもった視点」ではなく、いわば、「身体を喪失した視点」のみが立ち入ることの許される場所なのである。

ここでは重大な分離が生じている。つまり、ウィルからすると、谷は生活の場所である一方で、山は観察の場所となってしまう。ここでは、「生活」と「思想」が分離している。観察し思索するためには、生身のからだをもって生活するという共同体の暮らしから、離れねばならない、ということである。ここでは、ウィリアムズが『文化と社会』で批判したロマン派的な分離が、じつのところ具体的に言い換えられている。

芸術家と「大衆 (public)」という、いまや人口に膾炙しきった感の分離のはじまりのひとつは、ウィリアムズに従うのであれば、(定冠詞“the”の付された)ロマン派にある。「芸術家」とは、「才能」ある少数者 (genius) のことだったのだが、これはさらに抽象化されて、「1820 年代以降、「知識人」と呼称されることになる、特別な種類の人びと」こそが、「大衆 (public)」に対比される存在へと化していく (*Culture and Society* 34-35)。実際的な技術を重視する「大衆」と、創造的な想像力の使い手である芸術家あるいは知識人という分離が生じてしまった、という言い方をしても構わないだろう。² このとき、「想像力」という資源は、共同体からひとまず奪われてしまい、人びとの営みの全容を想像するという行為は、芸術家あるいは知識人によって独占されてしまうことになる。

この重大な分離を、『辺境』のウィリアムズは、生産的に書き換えている。知識人の卵としてのウィル自身には、グリーンモーという生活の場の全体を想像する力はあるけれど、そうした観察者「見習い」であるウィルには、生身のからだに欠けている。その一方で、農耕や養蜂といった実際的な生活の技術に長けた「大衆 (public)」の一員と (ロマン派的な分離の構図=デザインのもとでは) 見なされてしまうハリリーには、息を切らして山に登るという「身体」がある、といったように。「大衆」には身体がある一方で、「知識人」には「視点」しかないのだと、書き換えられていると言ってもよい。この書き換えは、なぜ、知識人の言葉が「大衆」には届かないのか、という実に今日的な問題への、部分的な応答になっているとも言えそうである。

² *Culture and Society* からの同引用箇所を関連して、自然主義との関係から考察したものとしては、大貫『わたしのソーシャリズム』へ』90頁を参照。

あるいは、これを、「文化主義 (culturalism) の陥穽」とでも呼ぶべきものから抜け出すための、試行錯誤の一部と名付けても良いのかもしれない。1980年代のウィリアムズは『文化のソシオロジー』において、じつにあっさり、『文化と社会』で記述されているような、力強い文化変容のヴィジョンを相対化する。ヘルダー、ディルタイを経てウェーバーへ、という「文化諸科学 (Geisteswissenschaften)」の系譜を手短に要約しながら、記述するものがそのうちにある人間的諸実践の全体を「直感的に把握」するという手法は、「形成的-啓発的精神 (informing spirit)」であり、それは「循環論法的 (circular)」である、とされる (*The Sociology of Culture* 15)。別な言い方をすると、「文化」の「文化研究」はつねにトートロジーに陥りやすい、ということである。人間の生活様式の変容のあり方そのものが文化であるとして、これを研究するとき、記述する人間が意識している文化の変容の理念 (idea) や理想型 (model) を、対象に投影してしまいやすいのであって、そのとき、文化変容の全貌は見逃されてしまう。1950年代のウィリアムズが『文化と社会』の終章で語った、文化とは、人間の生活様式を「自然」に「成長」させることであり、かつ、人為的にも「育む」ことである (*Culture and Society* 337)、という力強いヴィジョンにしてもおなじことが言える。記述するものが、その意識のうちに持つ「自然」のイメージや、あるいは「教育」のイメージ——これが対象に反映されてしまうとき、そこでの文化は、人間的な諸実践の、あくまで一部を記述したものにすぎなくなってしまう。生身の身体をもった人間が、抽象化された「階級」や「共同体」という思想 (idea) に応答しつつ、複雑きわまりない「ものの世界 (material world)」に、どう働きかけ、どう自らを変容させるのか——この問いこそが、人間的な諸実践の総体を探るために必要なものとしたら、そう言えることになる。

この「文化主義の陥穽」から逃れるために、1970年代以降のウィリアムズは、たとえば、「文化唯物論 (Cultural Materialism)」や「文化のソシオロジー (A Sociology of Culture)」というフレーズを用い始めたのではないだろうか。あるいは、『ブラック・マウンテンズの人びと』を書くウィリアムズであれば、考古学や人類学、郷土史、はては地質学にまで、その関心を広げたわけだが、その理由のひとつは、文化変容を「直感的に把握」することだけに、みずからの書き物を限定させないようにするためだったのではないか。もちろん、文化変容の「直感的な把握」は、手放すことができないものである。ただしそれと同時に、その記述が「循環論法」にはまり込まないようにするためには、言ってみれば、「意識」の外側へと、あるいは、本稿の趣旨に添って言い換えれば、

ロマン派的な「思索する知識人」の外部へと、(逆説的だが)意識的に出て行かねばならない。

そして、この「文化主義の陥穽」から這い出るための悪戦苦闘は、『文化と社会』という、「文化主義」が支配的なトーンを持つものと時に解しえてしまう著述を書き記しつつも、それと同時に『辺境』を書くことの方にむしろ多大な時間を割いていた1950年代のウィリアムズに、すでに垣間見ることができる、ということになるだろう。すでに見たように、「思索」と「生活」の分離、というロマン派的な構図=デザインを、「身体を欠いた視点」と「身体をともなった視点」という分離へと、生産的に書き換えているのが、『辺境』なのである。

論を戻しつつ、この書き換えが、なぜ「生産的」であるかと言えば、『辺境』の記述がたんにロマン派的な「知識人」像の批判あるいは否定に終わらないためである。この「身体を欠いた／ともなった」視点という分離は、じつのところ、表面的なものであり、両者のあいだには、すなわち、ウィルとハリーのあいだには、連続性が見出される。これまでみてきたように、両者の分離を読者に想像させるようなかたち=フォームが、植物や地形の描写などによってつくり出されているわけだが、その一方で、両者のあいだには隠れた連続性があることを想像させるようなかたち=フォームもまた、『辺境』にはあるのであって、これを次節以降、1926年のゼネストに深く関わるハリーを軸に、考えてみたい。

4. 1926年ゼネスト、共同体、そして個人

「1926年の春」、五月のグリーンモーは、「果樹園の花々や、生け垣のサンザシと野リンゴの花々が白く咲きほこり」、「スマイレ」や「サクラソウ」もそれぞれ、紫と淡紅に色づいていた。上空を見上げると、「数えきれぬほどの鳥たちがさえずりながら飛翔していた」(*Border Country* 101)。

「真冬と変わらず、ホンズィ川の水位が高かった」せいで、「川沿いの低地にある家々はすでに浸水していた」という描写をおそらく除けば、2010年代の現在もあまり変わらぬ光景が、1926年の五月にも眼前に広がっていた、ということになるだろう。しかし、「1926年の春」、グリーンモーの人びとは、「野の花や木々の花が咲き誇るなか……[炭鉱夫たちの] 争議の様子が記された新聞」を日ごと目にしていたのだった。「四月の終わりに、炭鉱産業への政府からの助成金が打ち切られ」、「雇用者」側と「炭鉱夫たち」と

のあいだの交渉が不調に終わり、「ロックアウト」が宣言され、「ロンドンでの炭鉱スト交渉が決裂」したことで、いよいよゼネストが不可避になったことが、ハリーたちにも知らされることになったのだった(101-102)。

労働争議が本格化しているロンザ溪谷は、「この農業を中心とする谷から、山々を越えて約十マイルに位置する谷間の村々であり、炭鉱と炭鉱夫たちの住宅がところせましと並んでいた」のだった。とはいえ、ハリーもモーガンも、炭鉱夫たちのことを具体的にはなにも知らない。モーガンは「労働者階級のため」にゼネストに参加するのだと熱弁するのだが、争議に加わっているロンザの炭鉱夫たちは、実際には(まだ)会ったこともない人びとなのである(102, 104)。

つまりポイントは、「階級(class)」が、グリーンモーのような共同体にとっては、外からやってくる思想に過ぎない、ということなのだ。ウェールズで産業革命が本格化する19世紀中盤に、突如として労働者階級が誕生したわけではない。労働者階級というのは、まずは抽象的な思想以上のものではないのであって、それは、グリーンモーのような共同体の存在と、具体的に組み合わせて考えないと、じつはほとんど意味をなさない。「1926年の社会的意義」と題された文章でウィリアムズは書く。

[連帯して行動せよと求め強く迫ってくるのは] 場所や仕事といったものでもなければ、物理的な繋がりでもない。それは本質的には思想(idea)であり、彼らにとって直接的な地域固有の物質的利害と矛盾しさえする可能性がある思想なのである。(Raymond Williams, “The Social Significance of 1926” 41)³

『辺境』の舞台である国境沿いの村と、労働争議が激しかった南ウェールズの炭鉱地帯は、確かに、言語や言葉づかいという文化的な観点からは、「ひとまたぎ(in the breath)」(*Border Country* 35)の距離しかないのだけれど、実際の交通という社会的な観点からすると、実際に知り合いになる機会がほとんどないほどに隔てられているのであって、ここで「階級」という言葉は、まずは「思想」、つまり、生活の場から遠く離れた「知識人」によって語られる、(こう言って良ければ)ロマン派的な「思想」に留まるのである。

³ 1926年ゼネストとウィリアムズについてのさらなる詳細については、大貫・河野(2013)を参照。

しかしハリーは、その抽象的な思想を実践しようとする。そのプロセスのなかで、グリンモーという共同体を構成する人びとと、のっぴきならない緊張感が生じることになる。たとえば、ハリーとエレンの借りている家屋の大家であるハイバート婦人は、ハリーに、「ストライキをして、文無しでいようなんて、馬鹿もいいとこだ、そんなまねをするなら、家賃はうけとれないよ」(148)と厳しい調子で言葉を投げつけることになる。そして、そのハイバート婦人は、バプテスト派のチャペルに、普段は一緒に通う隣人なのだけれど、どうやら実際には旧国教会系のチャーチで式を挙げつつもチャペルに通っているプライス一家との、潜在的な緊張感まで出てきてしまうことになる。ウェールズは、歴史的に、非国教会系キリスト教、すなわちノンコンフォーミズムの牙城で、プロテスタント系はチャペル、旧国教会系はチャーチと呼び分けるのが、いまでも続く習慣である。このゼネストによって、このチャペルとチャーチの潜在的な対立関係まで、あらわになってきてしまうのだった。

そんななか、ハイバート夫人は、明らかに厳しい態度をとり、ゼネストへの不快感を露骨に表明する。ただし、その彼女が、「家賃はうけとれない」といって、お金を強引にハリーに返してしまうくだりを、読み落としてはいけないだろう。

彼女 [ハイバート夫人] は、彼 [ハリー] の手を取り、その家賃分のお札をたたんでつかませた。

「全部終わったら、そのときにうけとるよ」

「借りをつくりたくないんですよ」

「借り？ そんなものここにあるもんかね」

ハリーは思わずたじろいだ。

「さあ、さっさと仕事をすることにしなよ」と彼女は言い、アイロンのある場所へと戻っていった。「いますぐ信号所に戻りな。こんな使い物にならないストライキなんて、忘れちまうことだ」

「わたしは、決して忘れないですよ、忘れるつもりはなにひとつないです (“I shan't forget anything.”)」(Border Country 149)

ストライキに参加しているハリーは、鉄道信号手としての週給 (wage) を受け取ることができず、庭の小さな菜園や借りた農地での収穫、芝刈りの臨時のアルバイトをして

もなお、生活それ自体の維持が困難になっている。プライス一家は、誇張抜きに、「食べられない」状態になりかねないのだった。言い換えると、ハリーは、生身のからだを持ちつつ、つまり、何かを食べねば生きていけない身体を持ちつつ、かつ、「階級」という抽象的な思想を実践する人間になっているわけだ。重要なのは、ここに見られる、ハリーの「身体をもった視点」がこうむる変容である。ゼネストに嫌悪感を示しつつも、隣人であるハリーをいわば許容するハイバート夫人の姿を目にして、ハリーは“I shan’t forget anything”と言うわけだが、この(直訳すれば)「なにひとつ忘れることはないです」という言葉には、“won’t”ではなく“shan’t”が用いられていることに注意するのであれば、重大な「決意」が示されていると解することができるのかもしれない。ここで「忘れることはない」とされているのは、字義通りに解せば「どんなことでも (anything)」なのであり、ということは、狭義の「ストライキ」の記憶だけではないことになる。家賃を突き返すハイバート夫人、さらには、そうした姿の背後に透けて見える共同体のあり方そのものもまた、ハリーは決して忘却することがない、と意を決して述べていると解すべきなのだろう。

つまり、「分かる共同体」において、ハリーのように、生活の危機に直面しつつも何かを変えようとする、いわば突飛な諸個人は、「分かる」存在なのである。何かを共同体のためにしようとするがゆえに、奇矯に見える振る舞いをする諸個人を、漠然とではあれ「分かる」存在として解するのが、「分かる共同体」と言っても良い。ハリーのような人間は、じつのところ、共同体の重層的な歴史のなかに、何人もいたのである。そうした姿は、漠とした記憶なのかもしれないが、共同体に確実に継承されている。ハリーが「忘れることはない」と強い口調で言っているのは、むしろ、こちらの方、すなわち、ロマン派的な想像力が想像することのできない——想像され終わった共同体 (imagined community) ではなく——想像する共同体の方なのではないだろうか。

ここからは、社会科学という抽象によって「観察」しようとするマシューと、階級という抽象によって同じく「観察」しようとするハリーのあいだに、一種の連続性が生じてくることになる。双方とも、共同体であるグリーンモーから「距離」を取らざるを得なくなる。ただし前者のマシューは、本稿の冒頭で述べたように、その観察がうまくいかなくなってしまうと、人びとの生きられた経験を記述することができない。その一方で、ハリーの方は、すでに述べたように、ゼネストに参加することで「距離」は取るのだけれど、それによって、共同体の実相、すなわち、異端者をそのうちに重要な資源

として組織化する集団としての共同体が見えてくることになる。

そしてなぜ、ハリーが「観察」出来ているのかと言えば、それは、彼の「視点」が「身体をもった」ものであるためなのだった。繰り返すと、生活の危機に直面しつつも「思想」を実践したからこそ、ハイバート夫人の背後に透けて見える共同体の実相に迫ることができたのだから。こうなると、『辺境』の最終場面でのマシューの言葉にある「距離」の意味を、うまく解することができてくるだろう。

「……その旅路を、ある意味でようやく終えることができたよ」

「大変な旅だった、わたしもそう思うわ」

「その通りだ。これでようやくエグザイルが終わるように思う。戻る必要はない、だけど、エグザイルの感覚は消えつつある。距離を測れたんだから、これが問題なんだ。距離を測るとき、僕たちは帰郷するんだ」(436)

ここでの「距離」とは、マシューとハリーのそれのことだろう。そして「距離」を図るためには、なんらかの尺度あるいは共通性が必要である。両者の「共通性」とは、観察者であることに求められよう。違いは、再度繰り返すと、マシューの「視点」には「身体」がなく、ハリーのそれには「身体」が備わっていることである。このとき、マシューの挫折の契機がはっきりしてくる。それは、山頂にたちグリーンモーという共同体を俯瞰するウィルが、「山」とは生活の場所ではないと考えてしまった、その瞬間のことである。しかし逆に言えば、「山々」とは、観察する場所なのだけれど、その観察が、生身のからだをもった「視点」によって為されるとき、共同体の、べつの（やはり重層的な）歴史が見えてくることになるろう。

これを、若きウィルが「山頂」という短時間しか滞在できない場所ではなく、「稜線(リッジ)」にたつとき何が起こるのか、という問題と言い換えてもかまわない。「稜線」は境界線(ボーダー)でありつつも同時に、やはり生身のからだを持つ人びとが行き交う場所でもあった。そのとき、グリーンモーという共同体は、ノルマンの城々からたんに「蹂躪」されるだけの場所ではなく、そうした悲劇的な歴史のなか、様々な諸個人が生活のための技術(art)を携えて流入してきた場所として、また違った様相を帯びてくることになるだろう。こうした、ごく複雑な共同体の歴史の有り様を、旧石器時代まで遡って記述したものが、つまり、「山頂」というよりも「稜線」に立つ諸個人と共同体との

複雑な交渉が記されているのが、ウィリアムズの死後刊行作『ブラック・マウンテンズの人びと』ということになりはしないか。しかし、それと同時に、『辺境』、『第二世代』、『マノッドのための戦い』というウェールズ三部作を詳しくみることで、またべつのかたちにおける諸個人と共同体との関係が浮上してくるのも事実であろうし、そこでは具体的には、(共同体の内部からも組織化されてくる)「代行・表象 (representaion)」が鍵語になってくるのだろう。そのとき、ここで触れた『辺境』と『ブラック・マウンテンズの人びと』における「山頂」や「稜線」に立つ諸個人と共同体という問題系が、三部作と「代行・表象」という問題系の考察に資することになるのではないだろうか。

* * *

ただし、いずれにせよ重要なのは、そうした人びとの間の関係や、人びととの間の関係が、完全に定式化された思想 (idea) としては必ずしも記述されず、むしろ、生身のからだを持った人間と (言語も含めた) マテリアルな世界との複雑なやり取りの最中で生み出される「かたち (form)」として記述されることがある、という点だろう。1926年ゼネストとその持続する影響を描く章の次の章で、マシューは以下のように鉄道を「観察」する。そこで見出されているのは、はたしてどのような「繋がり」なのか。「連結」されながらも、ときに分離し衝突することによって、「カーヴ」すなわち「難局」を切り抜けてゆく紐帯がそれなのか。だとしたら、それを可能にしている「緩衝器」は誰がどこで何から作っているのか。「カーヴ」すなわち「難局」を切り抜ける乗員たち、それを見守る「信号手」たち、その路線を保守する作業員たちは、互いにどのようなコミュニケーションを行っているのか。「スクラップ」すなわち「残滓的な」文化は、どこで誰が集めて積んだものなのか。「炭車」に積み込まれた燃料すなわち「希望の旅路のためのリソース」は誰がどこで掘削しているのか。あるいはそこにあるのは、モータリゼーション以降にはもはや無効となった「繋がり」なのか (となれば重要になるのは自動車工場をその舞台のひとつとする『第二世代』であろう)。こうして終わりのなく発せられる問いは、『辺境』を読むものに手渡された、唯一解のない問いであるに違いない。

マシューは [信号所から] 外を見下ろして、線路がキャンプストーンの下の方角へと続いている方角に視線をやった。列車の吐く煙は、そこでようやく視界に入ってくる。煙が近づいてくると、まもなく遠くに車両も見えてくるのだった。最初のシグナルが入って路線指示器の針が動くのを待って、最初のレバーを戻した。急行の貨

物列車が激しい音をたてながら駅に近づいてくるのを感じながら、彼は、いくつもあるレバーのそばにたち、その二つを戻した。急いで窓に駆け戻ると、運転手が手をあげながら信号所の横を通過していた。そのなじみ深いしぐさによって、ひとつの感情の世界の、そのすべてがせきをきったように解きはなれたのだった。図体の長い黒色の機関車、スクラップを満載した無蓋貨車の連なり——いまやこれが、マシユーのからだと心のすみずみを満たし支配したように思えた。彼はまず炭車の方を向いた機関士の帽子を、そして車輪を、油で光るスプリングを、がっしりした連結器をじっと見つめた。線路が坂の部分に入り、グウェントンに向けてカーヴに入るとき、緩衝器がやかましくたてる音が、車両と車両のあいだのひとつひとつから、途切れ途切れに聞こえてきた。最後に、有蓋貨車がやって来て、車掌はこっちに背を向けていた。ライトは定められた位置にある。必ずこれを確認するのだ。マシユーは向きを変え、残り二つのレバーを戻すタイミングを待ち構えながら、列車の力から、ゆっくりと立ち戻ったのだった。(Border Country 175-176; 傍点は引用者による。)

参 考 文 献

- [邦訳のあるものについては参照させて頂いたが文脈に応じて訳し直した場合がある。また、*Border Country* (Parthian 2005) には、管見の限り、総頁数の異なる二つのヴァージョンがあるが、本稿が参照しているのは総頁数 436 の方である。]
- The Black Mountains/Abergavenny. Map. Southampton : Ordnance Survey, 2010.
- Davies, John. *A History of Wales*. London : Penguin, 2007.
- Hall, Stuart. "Culture, Community, Nation." *Cultural Studies* 7 : 3 (1993) : 349-363. <<https://doi.org/10.1080/09502389300490251>>.
- Smith, Dai. Introduction. *Border Country*. By Raymond Williams. ix-xiii.
- Williams, Raymond. *Border Country*. Cardigan : Parthian, 2005. [『辺境』小野寺健訳、講談社、1972年。]
- . *The Country and the City*. London : Chatto and Windus, 1973. [『田舎と都会』山本和平、増田秀男、小川雅魚訳、晶文社、1985年。]
- . *Culture and Society : 1780-1950*. New York : Columbia University Press, 1983.
- . *People of the Black Mountains I : The Beginning . . .* London : Chatto and Windus, 1989.
- . "The Social Significance of 1926." *Who Speaks for Wales? : Nation, Culture, Identity*. Ed. Daniel Williams. Cardiff : University of Wales Press, 2003. 39-44.
- . *The Sociology of Culture*. Chicago : The University of Chicago Press, 1995.
- 大貫隆史『「わたしのソーシャリズム」へ——二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ』、研究社、2016年。
- 大貫隆史・河野真太郎「レイモンド・ウィリアムズ——ストライキ、共同体、そして文化」、『POSSE』第20号(2013) : 218-231頁。

Community, Perspective, and Body : Reading Raymond Williams's *Border Country*

Takashi ONUKI

Raymond Williams's idea and defence of community have long been criticized by the second generation of the New Left, such as Stuart Hall, because of its serious inadequacies in the age of proliferating globalization and "centred nationalism." There, Williams's "knowable community" was interpreted as a community that might not just be unable to deal with fundamental transformations caused by globalising capitalism, but also be likely to be incorporated into exclusionism.

However, *Border Country*, the first novel by Raymond Williams, closely read, reveals its "knowable community" that, although it seems to distance itself from Harry Price's action concerning the 1926 general strike, does in fact anticipate the emergence of his kind of "stranger." Certainly Harry Price, father of the protagonist Matthew, is regarded as a "stranger" by his neighbours such as Mrs. Hybert, a landlady, who blames Harry for his taking part in the strike, but she refuses to take a rent from him, who makes every effort to earn money during the strike. It might follow that the "knowable community" of Glynmarw in *Border Country* is not an "imagined community," a community of which the process of imagination has already been finished, but a "community that imagines," a community that still imagines the covert importance of strangers like Harry, as indispensable resources for its survival.

At the same time, we have to draw attention to a continuity and difference between Harry and Matthew, a railway signalman who also does farming and a university lecturer who was displaced from his native community to the metropolis. Matthew, an exile who hastens home to see his father Harry sick in bed due to a sudden heart attack, is actually suffering from his inability to apprehend the essence of the object under his study, the experience of those displaced from their native communities in "the middle decades" of the nineteenth-century south Wales. Yet, striving to imagine, from within, his father's lived experience, to imagine his father as he was settling himself in Glynmawr, Matthew gradually realizes the process in which Will, a pet name in Matthew's youth, comes to be, as it were, an observer without flesh and blood, an observer likely to abstract from lived experience. But this finding shows Matthew that Harry was also an observer *with* flesh and blood, an only-human observer who closely looked at the mountain, where he then started beekeeping. There is a continuity between Will and Harry, either being an observer; a difference in their attitude as an observer.

This separation between the two could be Williams's paraphrase, in his fiction, of the renowned division between the artists or intellectuals and the public in the period of the English romantic school, formulated in Williams's theoretical work, *Culture and Society*. To be more precise, the former could be a productive response to the abstract formulation in the latter, for we might be able to find out a key to avoiding a pitfall of culturalism in which we end up concluding only the abstract perspectives are the drive of human practices.